

# 「王子主婦連」の成立と意識変革 —生活改善会・王子争議体験・会誌発行にみる—

岸 伸子

## 目次

はじめに テーマへの接近

第1章 生活改善会から移行した王子主婦連

第2章 無期限ストと王子主婦連の意識変革  
マスコミと幻灯から

第3章 王子主婦連『あゆみ』『主婦の窓』を発行  
おわりにかえて —王子主婦連の歩みから—  
付表

## はじめに テーマへの接近

### 1. 戦後労働運動史における王子争議の位置

王子製紙争議（王子争議）は、総評傘下の紙パ（紙パルプ）労連王子製紙労働組合（王子労組・第一組合）と王子製紙（株）による労働協約をめぐる人権争議である。1958年の勤評（勤務評定）や警職法（警察官職務執行法）反対の統一行動と相まった労働争議である。50年代労働運動について、日鋼室蘭争議～王子争議～三井三池争議との関連性は「労使紛争の連続する戦後の争議史の山脈の三つの高峰」<sup>1</sup>ともいわれてきた。王子争議では、「権利闘争」という「共通意識」で共闘を組む炭労（日本炭鉱労働組合）によると「日鋼室蘭争議の二の舞をふむな、日鋼闘争の経験を活かせ」の意識が「強かった」という<sup>2</sup>。労使ともに日鋼などの経験を取り入れた「家族ぐるみ」の労働争議が王子争議である。

1958年の145日無期限ストライキ（無期限スト）へ突入し、ストに入るや王子製紙新労働組合（王子新労・第二組合）が結成され組合は分裂した。王子製紙（株）の本社は東京銀座にあり、争議当時の製紙工場は戦前から主力となっていた苫小牧工場（北海道）、戦後新設された春日井工場（愛知県）があり、王子労組支部は東京、苫小牧、春日井の三支部であった。「組合員の妻」たちは王子製

紙主婦連絡協議会（王子主婦連）<sup>3</sup>を1957年に苫小牧、1958年に春日井で結成した。

紙パ労連は首切り「合理化」が相次ぐなかで1954年に「中立組織」から総評へ加盟し、王子労組は、連繰（連続繰業）の「攻勢に耐え抜いた」大手2つの組合のひとつであった<sup>4</sup>。日本生産性本部が発足した1955年には、王子労組は紙パ労連中央執行委員長を送り、王子製紙社長は紙パルプ連合会会長、日本産業訓練協会発足時の会長に就任した。従って王子争議は、紙パ産業における労使のトップ同士の「ぶつかり合い」であった。全道からの「警官隊の出動」などテレビ、新聞の報道も過熱した。さらに組合分裂による争議の激化は教育現場に避けがたい子どもたちへの影響をもたらした争議でもあった。

### 2. 本稿の課題

本稿では王子労組苫小牧支部に事務所をおく王子主婦連を対象とする。本稿の課題は、王子製紙の従業員家族であった「従業員の妻」たちが「労働者の妻」と自ら書き表すに至る、その女性たちの意識変革をもたらした契機を探ることにある。王子製紙の「従業員の妻」たちは1955年にはじまった生活改善運動に加わり、翌年発足の生活改善会では大いに力を「発揮」した。そして生活改善会は、1957年王子労組苫小牧支部の働きかけもありながら、「社宅各地区」（市街居住者含む）の「主婦全員」で構成された王子主婦連へと移行した。王子主婦連は会社側でも組合側でもない「中立」を掲げて活動をしていたが、無期限ストにおいて自らの「目」をもって判断しようとする姿勢を生みだした。

「労働者の妻」の表現は、無期限スト中より現れ、その後発行された会誌『あゆみ』『主婦の窓』などにも記され、語られた<sup>5</sup>。筆者の王子主婦連

<sup>1</sup> 大河内一男『戦後日本の労働運動』〔改訂版〕岩波新書（青版）217 1961、222頁。

<sup>2</sup> 藤田若雄「王子製紙争議」（藤田若雄・塩田庄兵衛編『戦後日本の労働争議』御茶の水書房1963、410頁）。

<sup>3</sup> 王子製紙主婦連絡協議会の名称の確定以前には「王子主婦の会」、ニュースでは「王子主婦連協」もみられる。

<sup>4</sup> 全国紙パルプ産業労働組合連合会（紙パ労連）『紙パルプ労働史』労働旬報社1975。

<sup>5</sup> 春日井支部王子主婦連一同による転勤する家族の藤田

への関心は、当初の王子主婦連の存在そのものから、王子主婦連の行動を励ました王子労組青婦部の「うたごえ」活動へ、さらに王子主婦連の会誌などにみられる意識変化に関するものへ移行してきたといえる。それは筆者自身の関係者と資料との巡り会いからはじまり、現代史研究分野の女性史・高度経済成長・戦後社会運動・生活改善運動関連などにおける大門正克「戦争と戦後を生きる」(『日本の歴史』第15巻小学館2009)をはじめとする近年の成果<sup>6</sup>を学んだ事による。加えて、労働文化の視点から労働運動を検証する近年の研究動向のなかで王子争議の写真や幻灯、会誌などの重要性を再認識することとなった。それらをふまえて王子争議における王子主婦連の活動を地域女性史の観点から見直してみたい。

### 3. 本稿の課題に接近するまで

以上のような課題に接近するまでの筆者自身の経験と、地域女性史として取り組んできた王子主婦連への関心、さらに王子争議を「語りつぐ」活動の一端を報告しておきたい。

**①筆者の王子体験** 筆者は、1958年には苫小牧市内の王子製紙従業員ではない一般家庭の中学2年生で、初夏には「さっぽろテレビ塔」や北海道大博覧会(札幌・小樽)の学校見学へ出かけた。7月には「皇太子殿下、(王子製紙)苫小牧工場をご見学」<sup>7</sup>もあった。無期限スト中の通学路には赤ペンキの「オルグの家」の文字がみられた。そして争議後の王子労組の「子弟不採用問題」がある中で1963年、IBMの大型電子計算機が導入された頃、苫小牧工場へ就職した。労組の所属は、問われることなく退職までの5年半を王子新労の所属となった。生産性向上運動の一環であったろう、ポス

栄子への『お別れノート』1960/6に「労働者の妻」の記載がある。

<sup>6</sup> 広川禎秀・山田敬男編『戦後社会運動史論』大月書店2006。『日本の歴史』第15、16巻小学館2009。『高度成長の時代』1～3大月書店2010～2011。永原和子『近現代女性史論』吉川弘文館2012。大門正克編著『新生活運動と日本の戦後』日本経済評論社2012。『シリーズ戦後日本社会の歴史』1～3岩波書店2012～2013。早川紀代「戦後女性史研究の動向と課題」『年報 日本現代史』第18号現代史料出版2013。成田龍一「もはやか、いまだか1950年代の歴史像」『週刊朝日百科 日本の歴史』45朝日新聞出版2014。吉沢夏子「消費社会とジェンダー」『新体系日本史9 ジェンダー史』山川出版社2014ほか。

<sup>7</sup> 王子製紙編『王子製紙社史 戦後三十年の歩み』1982、619頁。

ター「世界の王子」を女性事務員たちで描き、赤レンガ事務所内の壁面に張りだしたことがあった。社内に漂う王子争議をタブーとする判然としない空気を疑問に感じながら退社した。

**②北海道地域女性史のなかで** やがて筆者は近現代女性史に興味をもち、米田佐代子『近代日本女性史』(新日本出版社1972)に刺激を受けていた。丁度、北海道各地の歴史の「掘り起こし」が在野の研究者も含めた民衆史や地域女性史研究として、教育・女性・平和の運動のなかでも取り組まれた時期で、そのなかに加わっていた。

1975年、苫小牧にて王子主婦連を中心に、王子争議後の「困難さ」を労働者の「楽天性」といって笑い飛ばすように語り合う座談会をもつことができた(北海道女性史研究会『北海道女性史研究』第9、10号、1976)。その座談会の掲載に対して、「女性史ではない！」(森山軍治郎)との批評や、「王子の城下町」だけでは苫小牧の特徴を「表現することにならない」(故堅田精司)との忠告も貴重であった。王子製紙在籍時には知らなかった王子主婦連の自覚的な集団の存在を捉えた70年代であった。

1986年刊行の札幌女性史研究会『北の女性史』(北海道新聞社)の共同作業では主婦会・家族会の項目などを担当した。北海道女性の近現代の足跡の再発見であり、資料調査の面白みを知る機会でもあった。

**③王子争議を語りつぐ活動へ** 1990年代前半には、王子主婦連メンバーからの知らせにより、王子労組の閉鎖にともなう資料保存に幾分か関わったが、資料を閲覧することなく、1994年には苫小牧支部裁判関係資料を法政大学大原社会問題研究所へ寄贈する橋渡しをさせていただいた。そして、争議体験は体験した女性たち自身が書くことが望ましいと思いながら、時折尋ねては抱いている想いに耳を傾けた。2002年に至り、書く行為よりもお互いが語りあうことで「王子争議とは何だったのか！」明らかとなるのではないかという願いをこめて女性6人の世話人会で「王子製紙争議を語りつぐ女性たちの会」発足し、例会には男性の方々の積極的な参加を得ていたことから2012年に「王子製紙争議を語りつぐ会」と改称した<sup>8</sup>。

<sup>8</sup> 世話人会(王子主婦連、王子労組・青婦部、王子新労、

「王子争議では何がどのように起こっていたのか！」の問いかけに対して、参加者は簡単に語りだせるものではなかった。それでも例会では、今でも苦小牧の市民生活へ深く影を落とし続ける王子争議、王子労組員への差別の「叫び」、停年退職後の両組合員同士によるわだかまりの解消、教育現場で苦闘した北教組（北海道教職員組合）苦小牧支会、室蘭や江別から駆けつけての日鋼争議などの証言となった。そして、うたごえ運動の楽しさや教宣部が撮影した教宣写真の迫力、春日井・東京支部の方々との交流によって、語りつぐ範囲を広げてきた。これらの証言、交流は王子争議への探求を継続する一つの方法であった。会の発足により、再会や関係者の紹介もあり、「疑問に思っていたことがわかった」、「やっと話す場ができた」、「これだけ（例会）は出んとね！」と、先輩たちからの声も聞かれた。そして事務局として資料紹介や資料の寄贈を受けるようになり<sup>9</sup>、例会テーマに即した資料をもりこんだ『おしらせ』を各会員に配布し、関係機関にも寄贈してきた。

④レ・パ復職闘争の「家族ぐるみ闘争」 「王子争議を語りつぐ会」の重山正吉世話人（王子労組資料整理責任者）は、王子労組レット・パージ（レ・パ）復職闘争（1956～1957）に関心を抱いていた。王子労組資料を北海道労働資料センターへの寄贈準備段階で、秘『昭和三十年十月 緊急人員整理に関する資料』綴りを発見し、さらに、重山は旧王子労組本部旧蔵資料（大原社会問題研究所蔵）によって「レ・パ復職闘争」の調査をつづけ、王子労組が「緊急人員整理（レ・パ）」に対して「組合としてたたかえなかった」ことを「悲しむべき汚点」として抱えており、その課題に対して1957年に会社側に「従業員なみの（生活）保障」をさせた経過を明らかにした。王子労組はレ・

パ犠牲者家族の苦痛を共有し、「私たちは復職要求をいかにたたかうか」という一問一答形式で組合員や主婦へ「組合ニュース」で周知を図った。レ・パ犠牲者の名誉回復運動が全国的に展開されるなかで、王子労組のとり組みが希有なものとして注目されている<sup>10</sup>。

さらに、「レ・パ復職闘争」資料には、その周知を図るための王子労組苦小牧支部『家族だより』がつづられていた。それによって王子の生活改善運動は、レ・パ復職闘争、年末一時金闘争と一体となって取り込まれ、一体として遂行するための戦術でもあった事がみてとれる。ここで、筆者自身が70年代に聞いた証言「王子主婦連が生活改善会からできた」の裏付けをやっと得ることができた。1956年春につくられていた生活改善会に組織され活発化した「従業員の妻」たちの戦力を王子労組は必要としたのである。一体化した生活改善運動、レ・パ復職闘争、年末一時金闘争は「家族ぐるみ闘争」であったといえよう。

⑤王子争議研究 さて、王子争議に関する主な研究をみてみると、個々の重要事項に対する検討はあるものの全体的な検討となると、藤田若雄による研究<sup>11</sup>と、竹田誠の研究<sup>12</sup>があげられる。藤田は王子争議の講師団の一員としても参加し、王子労組青婦部の女性へも着目するなど争議現場で収集した資料を丁寧に整理している（専修大学藤田若雄文庫蔵）。竹田は、労使、共闘支援者などから広く聞き取りを行い、「労資抗争」の展開の叙述に多用されているが、女性への聞き取りはみられず、王子争議における女性の視点はみられない。竹田は、王子争議の出発点を1957年の労災事故死の続発に対する王子労組の「慰霊スト」と位置づ

北教組の出身者ほか、事務局岸）。会員は道内外の関心のある20数名。例会は苦小牧にて、これまで17回開催。<sup>9</sup>たとえば、王子主婦連旧蔵等の王子主婦連関係の資料。加藤真栄子元・主婦連幹事からは随想『加藤真栄子ノート』や王子主婦連会誌『主婦の窓』7冊。「うたごえ」関連では片石満喜子元・青婦部員の『青婦部関係控帖』、大門孝之元・青婦部員からの『うたごえ』ノート、窪田亨元・紙パ労連書記による苦小牧取材の作詩、写真など。近年受贈（元・春日井支部書記長西岡久男、大門孝之両氏より）した王子争議の幻灯フィルム2巻は30数年前に塩沢照俊元・講師団員から委託された『説明台本』と一致した。

<sup>10</sup> 参照：組合結成10周年記念『王子製紙労働組合運動 別冊』王子製紙労働組合1956。田原賢蔵「なんといっても不滅！追想のレッドパージ復職闘争」『仲間よ 闘うことを忘れるな 春日井支部閉鎖記念誌』2001。王子労組資料整理担当 重山正吉編著私家版に『レッドパージ復職闘争と王子闘争145日ストライキ』2012、(検証)真剣に向き合った王子製紙労働組合『レッド・パージ復職闘争勝利の記録』2014。重山正吉「王子労組レ・パ復職闘争」『北海道経済』通巻565号2014/11/10。

<sup>11</sup> 藤田若雄『組合とストライキー転換期に立つ労働組合』東大出版会1959。前掲 藤田若雄「王子製紙争議」（藤田若雄・塩田庄兵衛編『戦後日本の労働争議』御茶の水書房1963）など。

<sup>12</sup> 竹田誠『王子製紙争議（1957～60）— “日本の労資関係” 確立をめぐる労資抗争—』多賀出版1993。

け、終結点は王子労組が組合分裂によって弱小化し<sup>13</sup>、王子新労が王子労組を凌駕する1960年3月としている。しかし、その後の「不当解雇撤回闘争」(1959～1978)が継続していることを重視すれば、1978年の労使による「和解協定書」調印の時点こそ終結点と捉えなければならぬと筆者は考えている。

⑥ **筆者の王子争議のとらえ方** 地域女性史として王子争議と女性たちについて書かれたものは、1970年代後半からみられるが、筆者も含めて王子主婦連の形成を掘り下げるには至っていない<sup>14</sup>。筆者は、王子主婦連の活動を王子争議の全面解決がなされた射程においてとらえて、さらに検討を加えて次のような時期区分としてきた(岸2003・2011参照)。

第1期 1940年代後半～(王子労組女子部員とともに)。第2期 1955～57年3月(生活改善会と「家族ぐるみ」活動)。第3期 1957年3月～58年3月(王子主婦連の発足)。第4期 1958年4月～12月(「闘う」王子主婦連への転換)。第5期 1959年1月～70年代(学び行動する王子主婦連)<sup>15</sup>。

本稿では、第2期以降を対象とする。主婦連の活動の源泉は行動力と学習活動にあると考えるが、会誌発行に重点を置いた。第1章において、王子主婦連は、その結成以前の生活改善会から王子主婦連への移行を組合側資料から明らかにする。第

2章は、無期限スト中の主婦連の活動をマスコミ、王子労組製作の幻灯によって紹介する。そして第3章では主婦連会誌(機関紙)への寄稿からストライキを闘った後の苦悩や疑問そして「脱落者」(脱退者)への憤りを越えた心境、労働運動を理解することが出来た喜びを表すに至った主婦連会員個々の「飛躍」に接近したい。そこには労働運動のなかで鍛えられてきた「労働者の妻」たちの軌跡があるように思われる。

王子主婦連の歴史的な役割を検討するうえで、筆者は「団体ひとかたまりの扱いを脱した家族会・主婦会を描く」こと、「会員個人の思い」が欠かせないと考えてきた(岸2003)。その方法として、主婦連の成り立ちと、「不当解雇撤回闘争」が続くなかで発行された会誌の執筆内容にも分け入ることによって検討したい。これらの検討は高度成長下の女性運動史や家族史を豊かにするために不可欠なことと思われる。

## 第1章 生活改善会から出発した王子主婦連

1950年代から60年代にかけての高度経済成長が、生活と家族のあり方を大きく変え、近代家族の定着を促してきたことは先行研究に明らかにされてきたところである。とりわけ企業体における主婦会などの組織づくりは、人口問題研究会による新生活運動があり、戦後の地域における生活改善、生活向上の要求とあいまって進んだ。王子製紙側からの組織づくりの働きかけは未解明であるが、家庭向けのいわゆる広報「家庭だより」は、社内報のみならず労組機関紙にとっても家族版が推奨された時代であった。王子労組『家族だより』は家族への周知、主婦たちを組織する手段であったがゆえに、王子の生活改善運動の記録ともなっている。生活改善運動の性格が労組側と会社側との両がらみであったことを如実に物語っているのではなかろうか。

### 1. 生活改善会の王子労組に対する独自性

王子製紙の生活改善運動は、王子主婦連結成以前に会社、労組、社宅世話人、婦人会<sup>16</sup>などの連名で複合的に1955年には取り組まれている。それ

<sup>13</sup> 1959年2月紙パ労連王子労組調「組合現勢力表」によると、王子労組3支部総員数は争議前の約4,500名から約2,800名(内苦小牧支部2,100名)へ減少。王子闘争記録編纂委員会編『王子闘争145日の記録 団結がんばろう』労働法律旬報社1959、379頁。

<sup>14</sup> 北海道女性史研究会『北海道女性史研究』には、第9・10号太田伸子 座談会「王子争議と私たち」(上・下)1976、第10号中沢周子「斗内スエさんのこと」1976。「王子争議とある女性の生き方」、「主婦連から社会奉仕へ 折笠あやと」『女性史 勇払原野の女たち』苦小牧市婦人団体連絡協議会1992。札幌女性史研究会『女性史研究ほっかいどう』では、岸伸子による「王子主婦連の活動が語るもの 王子製紙労働組合苦小牧支部・主婦連絡協議会」創刊号2003、「王子製紙争議五十年周年 王子争議をうたごえ運動とともに—王子労組苦小牧支部青婦部を中心として—」第3号2008。岸伸子「王子製紙争議の中の女性たち—主婦連と女性労働者」『報告集—新たな女性史の未来をどう切り拓くか』第11回全国女性史研究交流のついで実行委員会2011。

<sup>15</sup> なお、王子主婦連(苦小牧)の財政活動は残金処理を阪神大震災寄付にて終了(元・王子主婦連会計担当 薄井信子 85歳 2014/8/26談)。

<sup>16</sup> 「1947年9月27日苦小牧(王子)製紙婦人会設立」(『勇払原野の女たち』苦小牧市婦人団体連絡協議会発行1992、343頁)とある婦人会と思われるが、構成は不明。

は社宅内をめぐった回覧板「生活改善」文書3点によって判明しているからである(岸 2003 参照)。王子の会社資料は未見であり、労組・主婦連自体の資料も散在し、限られている。回覧板「生活改善」文書と新たに閲覧した王子労組『家庭だより』をもとに、1956年2月につくられた生活改善会の活動と組合要求、会社の「近代化」、主婦連の動向を【表 1】にした。この表から高度経済成長への会社のねらいと対応する労組の諸運動、主婦たちの「生活向上」への関心がある程度見えてくる。そして、それは王子の生活改善会が組合側に対しても独自性を含んだ王子主婦連として移行したことに繋がっていると思われる。やがて王子争議のなかで、「中立でいきます」<sup>17</sup>、「負ける争議ならしないで下さい」と主張した主婦たちの声に反映され、矛盾しているようではあるが、組合の言いなりにはならない主婦連独自の姿でもある。さらに、無期限ストに入る前月の王子主婦連の動きは「主婦連、スト反対の運動」(宮内ノート『組合記録』1958/6/21 付)と目され、王子労組執行部を震撼させてもいた。後で述べるように、その主婦連が王子争議のなかで「労働者の妻」を自覚していくことになる。

## 2. 王子の生活改善運動と

### 日本鋼管川崎工場の新生活運動

王子主婦連は、会員2,100名のほとんどが社宅街に居住した。1957年3月20日王子主婦連が生活改善会から移行し結成され、その「王子製紙主婦連絡協議会組織図」(第1回総会議案)は、日本鋼管川崎工場「一千世帯」の「新生活運動運営系統図」(『朝日新聞』1953/5/13 夕刊)と社宅組織のあり様がよく似ている。王子の場合、社宅の棟を小さな単位とした班・地区による構成では、班員→班代表→幹事→4地区の各会長・副会長そして、全体では会長1名・副会長3名・幹事44名で構成され、約8人程度の班員で構成する班はその数240、その代議員240名をもって運営する大所帯であった。「大企業の社宅に集住する主婦を組織化」する点では日本鋼管も王子製紙も同様の組織図となるのは当然である。それゆえに王子の生活改善会の組織図が王子主婦連の組織図へと引き継がれたと

推測する。

ところで戦後の経済復興において、生活改善運動を新生活運動のひとつの分野として、厚生省のもとで指導的に推進してきたのは人口問題研究会のリーダーたちであった。彼らは大企業における新生活運動、生活改善運動についても幾多の実践経験に基づき講習会などを開催し、普及してきた。その著書『企業体における新生活運動のすすめ方』(アジア家族計画普及協会編発行 1959)において「企業体における新生活運動」は「主婦の組織が結成されれば仕事の半分は終わったようなもの」(同書6頁)であって、「推進の方法」は「家族計画或は生活設計より出発し、家庭の合理的再建の基礎を造るべき」であるが、新生活運動では「家族計画と生活設計」のどちらを優先するかは「各企業体の立場」「特殊性」によること、家族計画から出発した方が「労働組合」「各家庭」に「受入れられ易い」(同書24頁)と推奨している。また、生活改善運動は「生活設計を立て、家族計画をして家庭の安定をはかる副産物として起こってくる」(『新生活運動の理念と実際』人口問題研究会編発行 1960、14頁)としている。

日本鋼管の場合は、大企業対象の新生活運動の先駆けとして多くの研究成果のうえに、より詳細な検討が加えられてきた<sup>18</sup>。日本鋼管の運動の出発は「家族計画」にあり、王子製紙の場合は実態として「生活設計」のひとつである「生活改善」にあった。王子製紙では「副産物」としての生活改善運動が社宅の労働者家族に受け入れやすかったということであろう。こうした会社と労組での導入過程は、1950年代後半以降の女性運動、労働運動との関連でどのように作用していったのか、興味深いものがある。

## 3. 王子の生活改善会発足にいたる戦後事情

ここで、王子製紙において生活改善が取り組まれた歴史的背景を考えてみよう。戦後王子の労働運動は、職工から従業員への待遇改善要求、王子海外諸工場からの引揚者対策、食糧危機と家族の生活安定が重要課題であった。王子労組の1946年結成後も青年部の女性たち、社宅の主婦たちの

<sup>17</sup> 前掲 王子闘争記録編纂委員会編『王子闘争 145 日の記録 団結がんばろう』199 頁。

<sup>18</sup> 田間泰子『「近代家族」とボディ・ポリティクス』世界思想社 2006。荻野美穂『「家族計画」への道—近代日本の生殖をめぐる政治』岩波書店 2008。

生活諸要求が労働運動の後押しをしてきた。1948年には社宅中部共同浴場利用者の「性病強制検診」に対して主婦たちは、王子労組女子部とともに抗議し中止させた経験もある<sup>19</sup>。海外諸工場からの引揚者とその家族への対策は、会社として迫られた課題であった。

1946年に人口問題研究会が決定した「新人口政策基本方針に関する建議」の冒頭で記す「類例のない過剰人口は今や歴然たる事実」<sup>20</sup>の認識は王子製紙経営陣の認識そのものと推察される。王子製紙にとって「敗戦による痛手は甚大」で「外地特に樺太に数多くの有力工場」などを失い、それは「資産40%を越える損害」であった<sup>21</sup>。戦後対策を迫られた社長は足立正（46年迄在任。56年日本生産性本部会長・新生活運動協会理事・日本商工会議所副会長）であった。ついで中島慶次（王子争議当時も在任）が社長となり、「外地従業員約1万2千人、家族数3万2千人」という「空前絶後の大問題」である引揚者対策の「陣頭指揮」をとった<sup>22</sup>。王子製紙は、戦前からいわゆる厚生施設対策は全国的にも「模範」といわれてきた。このような事情を考慮すれば、高度成長期にはいつて日本生産性本部の発足、最新の抄紙機（新聞用紙を連続的に抄く機械）の導入、労働協約の検討など人事管理も含めて人口問題研究会による対策、調査が実施されたであろうことは想像に難くない。

しかし、前掲の『新生活運動の理念と実際』には、王子の新生活運動は出てこない。中央労働委員会委員をつとめ、王子争議での中労委「斡旋案」を中山伊知郎会長とともに提示した藤林敬三は「労働運動と新生活運動」（『同書』103頁）において日本の労働運動がアメリカと比較して「日本の産業全体としてはそれほど大事なこと」ではなく、「たとえば先年の王子製紙の争議なるもの」は、「国民経済全体」、「国民生活全体から見ると、実は大した問題でもない」と指摘している。

しかしながら、前掲 王子労組『組合結成十周年

記念 王子製紙組合運動史 別冊』によると、「緊急人員整理（レ・パ）」の「敗北」の後、組合は「今では三回のストライキと生活改善の闘争を通じて大きく成長」していると述べている。そこで、次に王子製紙における生活改善運動の実態についてみることにする。

#### 4. 王子製紙の生活改善運動と王子主婦連

##### (1) 王子生活改善会の活動

【表1】は、王子製紙苫小牧工場における生活改善運動の1955年7月から1957年末までの状況をあらわしている。1955年11月の「第一段階」は、王子区世話人会が生活改善の「冠婚葬祭及び社交儀礼の合理化」について「実践要目案」の具体化を「社宅居住者」へ知らせ、「気づいたこと」を班世話人（班代表）へ伝え、各区での「相談」に反映させるという内容であった。

生活改善会は、『家庭だより』第16号（1957/1/15付）の回想によると、1956年2月に発足し、「地区ごとに組合、会社の強力な援助のもとに」、「塚本長蔵氏講演会」や「各地区主婦各位の自発的活動」によって諸行事が行われ、「主婦だけの活動が要望」されるようになった（岡田健一王子労組組織部長）。そして工場見学、料理講習会、知識を高めるための講習会等を開催した。料理講習会には、講師は坪田和子（王子病院栄養士・王子労組で初めての女性執行委員）、中部地区（12/20 151名）、弥生地区（11/11 272名）、山手地区（11/16 200名）、東部地区（12/18・19 407名）と盛況である。山手地区では「フルーツクラブサラダ、さんまの鳴門揚げ、風流煮（油揚げに野菜や肉を混ぜて詰める）」のメニューを調理した。

講習会の目的は、生活改善会を「主婦の集まりを良くする」、「順調に」発展させることで、「みんな一丸となってやれば〈やれる〉」ことが判ったという。主婦にとっては、「割にお金のかからない、最も身近なそして直ぐに役に立つ」料理講習が何よりの要望であった。

##### (2) 「アイマイ」な生活改善会から

###### 王子主婦連結成へ

1956年の年末の王子労組の闘いは、会社の新設備導入による「近代化」と「増産」に対して、各職場での「人員削減反対」、「一時金要求」、「レ・パ復職要求」の運動を一体化し、かつ生活改善の

<sup>19</sup> 前掲『王子製紙労働組合運動史 別冊』123頁。『婦人民主新聞』週刊第70号1948/2/26付。全日本産業別労働組合会議『労働戦線』No81 1948/3/6付。

<sup>20</sup> 篠崎信男編『人口問題研究会50年略史』1983、63頁。

<sup>21</sup> 前掲『王子製紙社史 戦後三十年の歩み』1982、2頁。

<sup>22</sup> 成田潔英著『王子製紙社史』第四巻王子製紙社史編纂所発行1959、282頁。

運動によって主婦たちの組織化を図り、翌年の王子主婦連結成へと繋がっていった。

1957年春、「家族の組織」について労働省婦人少年局は全国調査をしている。王子労組は「労働者家族のために優秀なあるいは特殊な福利対策を行っていると思われる事業所」として、全国138箇所、各都道府県の平均約3箇所の一つとして北海道婦人少年室の依頼により協力した。19番目の調査項目〈家族の組織〉は、興味深いので引用する。「特別にとりあげるものは殆どなく、炭硯関係で炭硯主婦協議会（炭婦協）、全国石炭鉱業組合主婦連合会（全炭婦連）へ参加している家族組合はあるものと、社宅に住む人たちの集まりとしての社宅婦人会、主婦の会（これは事業所、労働組合双方に同じ位のつながりをもっている）」「生活合理化講習会、教養向上のための研修会、家族計画講習会等を会社の援助をうけて時折行う程度にとどまっているものが、殆どのである」<sup>23</sup>という（下線筆者）。国としても「家族の組織」に対する関心の高さを示すものである。

こうした会社と労組に「同じ位」のつながりをもつ「家族の組織」の全国的な傾向のなかで、王子主婦連が出発することになる。1957年1月24日「生活改善会、今後の運営」を課題とする会合が招集された。王子製紙主婦連絡協議会結成への移行準備と思われる。同年3月20日第1回王子製紙主婦連絡協議会「総会議案」によると、「生活改善会の性格」は、「今後の発展にプラスになるかどうか大きな疑問と問題」があり、「極めてアイマイなうちに運営された」。「生活改善運動」の推進の中心となった主婦の活躍は「目覚ましく、好結果を残したことは事実」だが、「会社中心か、組合中心か、主婦が中心か」不明瞭な現実があった。「主婦は主婦として自主的に活動できるようにしなければ、他の集まりと手をむすぶことはむずかしいのではないか」との意見もあり、「他の団体」には「石蘭富士鉄主婦の会」、「炭硯主婦の会」、紙パ業界の「本州製紙は各支部」があった<sup>24</sup>。しかし、

王子主婦連が他団体の生活改善自体の内容を把握していたかどうかは疑問が残る。

### (3) 主婦連結成総会に反映された生活改善運動

1957年3月の王子主婦連第1回「総会議案」の「まえがき」文頭には、1950年代女性運動の呼びかけ「子供を守るため母親はひとつになろう」、「日本の、世界の母親大会」に呼応した数行の文言が含まれている。そして「生活改善運動」では、「王子の賃金は非常に高い」といわれるなかで「生活の実態はそれほど楽ではなく、各家庭の問題解決」のために「生活を合理化して文化的なうるおいのある日常」を要求としてかかげた。

「生活改善運動」の流れが王子主婦連の規約(案)の第4条に反映され、会の目的は「会員の社会的地位の向上を図ると共に、居住地区の改善と合わせて、生活を合理化し、文化的な明るい家庭生活を営み得る」ことにあった。規約第5条「目的達成のため」の事業には「1, 虚礼を廃止 2, 衣食住の改善と向上 3, 保健衛生意識の向上 4, 居住地区の施設改善と充実 5, 主婦の地位と文化意識の向上 6, 全員相互の親睦 7, 他の団体との連携」があげられた。「本年度の活動方針」の「保健衛生意識の向上」分野には、健康増進、蚊・ハエの駆除、道路掃除が含まれているものの、「家族計画」関連の文言は、含まれてはいない。

主婦連では「虚礼廃止の300円運動」が生活改

---

にかけて厚生課長による各社宅地区、社宅外居住者、または個人への家族計画の「運営実施」などを繰り返し指導。厚生施設等の「家族の声」を聞き、人口問題研究所依頼の調査なども実施。

北海道内の他業界をみると、「富士鉄主婦協」は1956年から家族計画を「6千戸の社宅に17名の推進員」で継続（『婦人週間北海道大会報告』王子主婦連協機関紙『主婦連会報』第1号1957/5/15付）。さらに1957年の活動に「生活改善」を取り組んだ主婦会は、「全連の主婦会」「富士製鉄社宅婦人連絡協議会」「日鋼室蘭主婦協議会」「東洋高圧労組の主婦の会」「全道庁組織の家族会（江差地区）」「全日通労組の家族会」などがあった（『全道家族組合（又は主婦会）連絡会議資料』1957/12）。そして三井鉱山砂川鉱業所の砂川炭硯主婦協議会「第6回炭硯協大会資料」1958/5/19（北海道労働資料センター所蔵）によると、1957年6月8日「家族計画について 会社本店 人口問題研究所理事長永井亨先生、厚生省人口問題研究所篠崎先生」、1959年1月23日「保健婦及び助産婦と各町役員懇談会（家族計画）」の事業を実施している。北海道炭婦協の創設期、1953年に中小炭硯の油谷芦別（鉱業所）では「生活改善運動」があった。（『研山は知っている 道炭硯婦協の20年』日本炭硯主婦協議会北海道地方本部1973、50頁。

<sup>23</sup> 労働省婦人少年局『事業場及び労働組合における労働者家族のための福祉対策』婦人関係シリーズ調査資料第21号1957。

<sup>24</sup> 本州製紙の新生活運動は、前掲『企業体における新生活運動のすすめ方』において大企業の「生活設計」参考例の「新生活運動経過報告」に詳しい。1955年から翌年

善でもっとも「ありがたかった」が、市街居住者や主婦連会員の親世代にとっては世間つき合いからの苦情も出ていた<sup>25</sup>。

また、生活改善要求の「居住地区の施設改善と充実」は労組の「春季賃上げ要求の内容」の重要項目となった。社宅改善には、社宅の部屋増し、社宅内便所の手洗場、臭気抜け設置、玄関拡張、社宅水道設置（本年300戸・廃棄社宅以外700戸未設置）、排水溝などであった。当時は、明治期に建設された「女中」部屋付きの5部屋（役員宅）は特別としても、大正から昭和にかけての社宅や戦後の引揚者急増に対応した社宅が混在していた。

水道の設置は、4軒長屋2棟に1箇所の共同水道が設置され、天秤担いで各戸で運ぶのが常で、吹きさらす苦小牧の冬は、蛇口から流れた水が滑って危険であった。加納千鶴子元王子主婦連会長（83歳）は会社の厚生課で「あんたの奥さんにも水を運ばせてごらん」と要求したという（2012・10談）。水くみは子どもの仕事でもあり、スト中の中部地区新聞『とどろき』には、小学校3年生の「早く水道つけて下さい」という声ののっている。

#### （4）主婦連結成後の

##### 「安全」問題・他団体交流による目覚め

主婦連結成まもない第1回幹事会は、年間行事の方針に「前に出た生活改善会行事予定に従うもその他についてはその都度話合っていく」と確認した<sup>26</sup>。そして、月1回44名が招集される幹事会は、1957年末までに次のような議題を討議した。苦小牧婦連協加盟、4市交流婦人講座、全国母親大会参加の資金カンパ、全道婦人大会参加報告、労働金庫積立貯金の集金方法、九州水害見舞い、『道新』栄養料理教室、会の持ち方（開催時間・議長）、物資斡旋（ビニールシート）、原水爆禁止運動準備、王子労組苦小牧支部長中国・ソ連訪問の報告、全道労協主婦会出席報告、原水爆禁止苦小牧地区協議会結成報告、教養部で生花、生活部の講習会には料理、ビニール手芸に関する議事などである。苦小牧市内外の平和、女性運動に関わり始めていったことを示している。

一方、王子労組『家庭だより』第18号（1957/10/20

付）は王子製紙の「近代化」関連も掲載し、1957年10月上旬苦小牧工場に「日本最大の208<sup>インチ</sup>マシン（約五<sup>尺</sup>幅の抄紙機）が完成」し、「我々の汗と油の結晶」と喜びの声を報じ、「労働者の声」には「生活の完成も」と生活要求もあらわした。それに対して、「ある主婦の声」では、「主人は倒れても会社は動く、一家はそれこそ大変」と安全性の危惧を表していた。危惧した矢先、11月3日「文化の日」に労災事故による「殉職者」が出た。「6号マシン、キャンパス取替作業中に」縫い目の切れ端を取り除こうとした労働者には遺児3名が残された。1957年中の労災事故死は5名（春日井・苦小牧工場）を続出。王子労組は「一時金、安全衛生問題に期限付きの回答」を求めたが、会社による引き延ばしから11月14日3時間の「慰霊スト」を行った。苦小牧支部ではストライキ当日の総決起大会において、主婦や組合員家族の「血の叫び」を「会社は、私たち労働者が死んでも機械は回るでしょうが、私たち家族は明日から肩身のせまい思いを一生続けるでしょう」と社長宛に抗議文を突きつけた<sup>27</sup>。

この頃、王子主婦連は全道規模の主婦会との交流を開始している。10月25日札幌労働者会館で開催された全道労協（全北海道労働組合協議会）主催による第1回全道家族会（又は主婦会）連絡会議に10名が「傍聴」参加した。参加総数「80余名」の1割を占める程、主婦会づくりに関心を示していたということが出来る。とはいえ王子労組の「慰霊スト」に続く年末一時金闘争における各地区「支援活動」にかけつけ王子主婦連のあつまり（常会）に参加した炭婦協の王子主婦連への感想はきびしいものであった。炭婦協代表4名から「貴女がたは王子会社の嫁なのか」「夫の妻なのか」とつめられるほど、王子主婦連は「のんびりしている主婦」たちであった。主婦連に漂う会員たちの認識は、いまだ主婦連とは「10円納める処」という意識が抜けない状況でもあったといえよう。それでも主婦連は、「私達の夫は組合員であり労働者であること、そしてその妻である主婦は中立で良いのかと、じっとしておられない気持ち」でゆれてもいたところを、「室蘭から富士鉄の主婦会、

<sup>25</sup> 王子労組苦小牧支部『家庭だより』第22号 座談会 1959/1/1付。

<sup>26</sup> 「主婦連協ニュース」No4 1957/4/3付。

<sup>27</sup> 紙パ労連王子労組『王子ともしび』第74号 1957/11/15付。

日鋼の主婦会」の激励によって「初めて勇気がでた」、そこに常会での炭婦協のひと押しが「一人一人の声で・・・夫と共に闘いましょう」と各地区とも団結したという<sup>28</sup>。

こうした王子主婦連結成1年目の活動の変化を振り返ってみると、王子主婦連にとって、高度経済成長下の高速抄紙機導入による「安全」問題に直面し、北海道内の主婦連、家族会の支援を受け交流を図ったことは、社会的な行動への飛躍、主婦連会員自身の目覚めの端緒となったといえる。その頃北海道では、全道労協を中心とした幅広く結集された労働、平和運動のなかで女性運動は一翼を担うようになっていた<sup>29</sup>。王子主婦連結成の翌1958年、北海道主婦会連絡協議会（道主婦協）が結成され、王子主婦連は役員や事務局員を送り、その活動に貢献した。

## 第2章 無期限ストと王子主婦連の意識変革

### —マスコミと幻灯から

本章では、1958年145日間の無期限ストにおける王子主婦連の変化、特に争議の本質を「知った」、言い換えると「見抜いた」「理解した」という3点をストライキの推移のなかでとりあげたい。3点とは、「労働協約の問題が台所と直結」していること、「労働者の妻の自覚」、警察とは「弱き者の味方ではなく、権力者の味方」であったという点である。

マスコミはその主婦連の姿を「活写」したタイトルで報道した。王子主婦連がその報道に対しては「本当のことを伝えていない」とも語られてきた。タイトルのほんの数例をあげてみる。8月末には「私たちも“第一線”王子第一組合の主婦たち」<sup>30</sup>、9月上旬の「傍聴席は主婦連などで超満員 王子労組員の拘置理由開示公判」<sup>31</sup>、「闘う主婦たち 王子苫小牧支部 三交代でピケに“私たちは労働者の妻”」<sup>32</sup>、「王子スト現地にみる“血みどろ”の社宅街 切り崩しは一段落したが（苫小

牧）」<sup>33</sup>、10月では地元『苫小牧民報』のコラム「潮流」は「王子争議解決の時機、暴力団横行す、女であること、先生方に望む」と枚挙に暇がない。週刊誌の特集もたびたび組まれた<sup>34</sup>。紙パ労連王子労組が教宣活動の一環として作成した王子争議の幻灯では、主婦連をどのように映し出しているだろうか。【表2】は王子主婦連の関連する活動をスライドから選び出し、台本による説明を略記した。

### 1. 無期限ストライキにおいて

#### 王子主婦連は「知った」

1958年の春闘は、王子労組が2月の賃上げ・退職手当・結婚資金を会社側へ要求したのに対し、3月会社側の昇給・就業規則改定による連続操業方式などの逆提案からはじまった。王子労組は「賃上げと連続操業問題の別個の交渉」を要求したが、「労使の立場は平行線」をたどり、部分ストを実施した。5月会社側の「労組が操業方式の改定に協力する条件」とする昇給・操業手当支給などの「最終回答」に対し、王子労組は拒否を決定した。6月17日「最終団交決裂」し、労働協約の失効により無協約状態となった。7月に入り王子労組東京支部の「脱退声明」発表、7月18日「無期限ストに突入」した<sup>35</sup>。無期限ストに至る経過を「苫小牧一主婦」の目からみると、次のようになった。

はじめのうちは「連続に協力して欲しい」というのが会社の狙いだと思った。そうしたら協約の改悪を出して来た。「本当にいやだったけど早くまとめるためには」と考えて協力する決心したら今度は「協約は絶対譲れない」という。そしてとうとう無協約にしてしまい、その次は矢つぎ早に“集会所は貸さない、お祭りの寄付もしない。ストライキをやったら風呂も止める、主食も現金売りにする”という。挙げ句の果ては第二組合をつくらせたり、ピストルと棍棒を持った警察まで動員する。

<sup>28</sup> 折笠あやと 王子主婦連会長・道主婦協副会長「勝利の日まで頑張ります」『主婦会だより』道主婦協発行 第2号 1958/8/25 付。

<sup>29</sup> 『北海道平和婦人会 60周年記念誌 60年のあゆみ 1954～2014』北海道平和婦人会 2014。

<sup>30</sup> 『北海道新聞』1958/8/22 付。

<sup>31</sup> 『同上』1958/9/3 付。

<sup>32</sup> 『アカハタ』1958/9/4 付。

<sup>33</sup> 『朝日新聞』1958/9/6 付。

<sup>34</sup> 「憎しみと喧嘩の「紙の街」—殿様争議の行方」『週刊新潮』1958/9/8 付。「今週の話 度が過ぎた“毒ガス”失言 流血のつづく王子製紙スト」『サンデー毎日』1958/9。

<sup>35</sup> 参照 「争議経過日誌」『王子製紙の争議』北海道労働部 1960、286 頁。王子製紙争議「日誌」『日本労働運動資料集成』第4巻法政大学大原社会問題研究所編 2005、406 頁。

して見れば会社の本当の狙いというのは“組合を無力にしておしまおう”ということなのだ。“連操”や“協約の改訂”はその狙いから出発した現れに過ぎないということを知ったのだ<sup>36</sup>（傍点筆者）。

王子主婦連は7月5日、はじめての主婦連総決起大会を1,500名以上で開催した。デモ行進のあとに代表12名は、「工場長の理解」に期待して工場次長へ「スト回避」の大会決意を持参したものの、話し合いの約束は果たされなかった。主婦たちは「炭婦協、日婦協（日鋼室蘭主婦協議会）、富士鉄主婦の会」との交流を決起大会直前の3日間に図り「労働者の妻としての自覚と誇」を深めていた<sup>37</sup>。だが、「鉢巻をしたり、赤旗を振ったりしない」申し合わせがあったという<sup>38</sup>。鉢巻は手渡されたものの締たのが「半月後」と回想する主婦たちは逡巡していたのだった。それでもスト突入の頃には、写真を見るとハチマキをしめた主婦連のデモ姿は着物に割烹着もあり、スカートにエプロンもあった<sup>39</sup>。徐々に変化した主婦連ではあったが、強烈な印象として多嶋光子元・道炭婦協会会長は「割烹着から鉢巻姿に一晩で変わった」（1978/7）とも語っている。

身なりの変化に伴い自覚も変化していた。主婦連が無期限スト突入後、「知った」ことに、「労働協約の問題が台所と直結」していることがある<sup>40</sup>。会社はスト突入後ただちに「7月19日以降の厚生施設の運営」を「平常の会社と従業員という信頼関係」が崩れたとして、浴場の「20日閉場、以後隔日閉場」と時間制限、理容・美容・靴修理・映画券などの発行済の分は「すべて無効」と、1枚の紙で通達した。厚生施設のプール閉鎖により、市内の沼で泳ぎ「ドロまみれ」で浮かび上がったという痛ましい溺死事故が発生した。北海道の遅く始まる夏休みに入ったばかりの7月24日、王子

西部社宅の西小学校4年生長谷川定則君10歳が犠牲となった<sup>41</sup>。その後プール使用の禁止は北教組（北海道教職員組合）の交渉によって解かせることができた<sup>42</sup>。

そして、組合分裂による第2組合に対する「労働者の妻の自覚」も育みつつあったといえる。「仲間を裏切っていった脱落者に対しては、にくらしい憎しみでいっぱい」（32歳）、しかし「自分の意志で（第2組合へ）入ったのはわずか、・・・主謀者についてはゆるせません。脱落した学卒者は学校を出れば労働者でないと考えているようですがもっと、労働者としての自覚をもってほしい」（42歳）。主婦として「よく罵声をあびせといいますが、あの時の憎しみの感情としてやむを得ない」と「私たちをそんなにさせたのは会社です」（35歳）と語っている。中労委による幹旋案が期待される中で、「余り期待かけられない」（43歳）との声もあった<sup>43</sup>。「知った」第2の「労働者の妻の自覚」については、次章の会誌の中で取り上げることにする。

さらに、王子主婦連が争議のなかで「知った」第3は、警察とは「弱き者の味方ではなく、権力者の味方」であるということであった。警官の巡回の「深夜、真暗にこおった大気の中をザクザクと不気味にひびく靴音。数々の「警察官の不当介入」は子どもたちに「やさしいおまわりさんの夢」を破らせることとなった<sup>44</sup>。警察官は不当介入、さらに「組合員、オルグばかりか主婦にまで暴力」をふるい「第1組合員のみを検束し、第2組合員は相当な暴行をしても見逃している」。9月11日には「執達吏の小型4輪車を先頭に脱落組約450名」が「隊伍」を組み、「両側から約100名の警官」が「護衛」して会社へ向い、「スト破り」を阻止しようとする第1組合員との「小競り合い」があった。その時、ピケを張っていた「主婦連約50、60名」の後から「どけるどける」と警官が「突っ込んで」きて、主婦連幹事長加藤真栄子（33歳）ら10

<sup>36</sup> 「私たちは本当に知った」（一主婦の投書から補作）紙パ労連王子労組『ともしび』1958/7/20付。

<sup>37</sup> 「王子主婦連協第3回総会 33年度経過報告」『王子主婦連』号外1959/4/18付。総会翌日の7/6主婦連会長・副会長は春日井へ出発、7/25春日井支部主婦連結成。

<sup>38</sup> 母の歴史・聞き書き「加納千鶴子さんのお話」（9）『新婦人しんぶん』第3051号2014/9/18付。

<sup>39</sup> 紙パ労連王子労組『ともしび』1958/7/20付。

<sup>40</sup> 『平和ふじん新聞』第286号1958/9/26付。

<sup>41</sup> 「佐羽内沼で溺死」『苫小牧民報』1958/7/26付。

<sup>42</sup> 『紙パ労連』350号1959/1/1付。なお、北教組苫小牧支会は王子労組支援をめぐり、夏休み末に臨時大会の大討論6時間をへて「全面的支援」を決定『北教組苫小牧支会のあゆみ』1994、15頁。

<sup>43</sup> 『紙パ道連』第26号1958/11/15付。

<sup>44</sup> 『平和ふじん新聞』第291号1958/10/31付。

名を検束。「ひきぬき投げ」飛ばされた坂野スイ(41歳)は「後頭部を強く打ち一時失神」した<sup>45</sup>。9月6日札幌地裁によって会社の「立入禁止、妨害禁止」の仮処分申請のうち「妨害排除のみ」が決定されていた。15日には「早暁約2,000名の警察官を動員して、新労566名が入構」した<sup>46</sup>。次第に激化する争議行為は新聞紙上に10月「泥沼闘争の“紙の町” 苦小牧で 女房族も闘争に一役」<sup>47</sup>など、全国に報道された。11月王子労組「斗争写真ニュース」No4でも「東北門に血の嵐を呼ぶ・会社の道具・脱落集団」と映画タイトルに似せた過激な文言も飛び交った。

無期限スト中の主婦連の活動は、王子労組と王子新労のピラなどのほか、会社の苦小牧工場勤労部「勤労ニュース」、マスコミ報道・業界紙・女性団体紙・政党機関紙などが「王子争議」には欠かせない勢力として様々な角度から伝えている。

## 2. 幻灯の記録に登場する王子主婦連

幻灯の記録は、スライドを映画上映用のフィルム上に「接続」して幻灯機で映写して見ることができる。紙パ労連王子労組教宣部1958年製作による幻灯(斗争記録スライド)は2種類が現存する。『紙都の嵐』第一部(苦小牧支部教宣部)と『団結がんばろう 協約改悪反対斗争記録』である。幻灯2種類の内容は1958年9～10月にかけての争議をとらえ、11月中旬の幻灯広告には「無期限スト百余日を記録」、「750円台本付き」と書かれ道内外の争議支援に活用された。『紙都の嵐』は今のところ現存するのは第一部1本で、台本はそれぞれ現存する一冊である。スライドでは、「激しい闘い」のなかで主婦連が次々と新たな局面に果敢に行動し、組合員・オルグ・他の主婦連からの支援に支えられ、団結袋や子どもたちの支えのあったことも伝えている。【表2】を参照していただきたい。

なお、スライドに出てくる「葬式デモ」「合同慰霊祭」の意味は、組合分裂の「主謀者」や工場長らに対する「いやがらせ」の行為であった。加藤真栄子は炭労からのオルグ団へ「そんなにまでし

なくてもいいのではないかと中止を訴えたと再三、語っている。しかし、「1週間は止まったが、また再開された」無念さも忘れられないのだった。

幻灯の製作をになった争議中の王子労組苦小牧支部教宣部には、組合、主婦連そして共闘オルグの共同による地区新聞、うたごえ、学習班、人形劇(ピッコロ座)、写真班、闘漫クラブが組織された<sup>48</sup>。写真班は10名から40名位に増員され、「常に最前線」で捉えた写真が迫力もって残された。その写真が基となり、闘漫クラブの漫画も入ってスライド化され、幻灯が製作されていた。

なお、幻灯は、鷺谷花によると1950年代から60年代の労働運動のメディアとして「数多くの幻灯が、労働者自身の手によって作られ」そして教宣活動におおいに用いられたという<sup>49</sup>。王子争議の幻灯はその一環として製作されたのである。

## 3. 無期限ストをへた王子主婦連の意識変革

王子主婦連は第2回総会を1958年3月に開催されたと思われる(資料未確認)。結成当時から「中立」を唱えていたにもかかわらず、「1年半いきなり」1958年の「闘いの渦」(無期限スト)に「まきこまれ」夫とともに闘った1年を総括し、1959年4月19日「王子主婦連協第3回総会」を開催した。総会議案の掲載は、第1回総会には王子労組『家庭だより』であったが、第3回総会では主婦連独自の『王子主婦連 号外』(1959/4/18付)となって配布された。総会資料にみる第1の端的な変化は「家庭と社会を結び労働組合と提携して、よりよい家庭、よりよい社会を築き」上げる決意を述べた折笠会長の挨拶、総会スローガン「労働組合に対する理解と協力を図りましょう」にあわれている。第2の端的な変化は「規約第2条」に見ることができる。主婦連発足時の規約第2条は「社宅各地区(市街居住者も含む)における主婦全員」であったが、無期限ストを経た1959年第3回総会の「規約第2条」では、王子労組苦小牧支部の「組合員の主婦若しくは主婦に代わるもの」へ改訂さ

<sup>45</sup> 紙パ労連王子製紙労働組合「警察官不当介入事実」専修大学「藤田若雄文庫」蔵。『北海道新聞』1958/9/12付。

<sup>46</sup> 北海道警察本部秘「王子争議に伴う警備措置上の問題点について」1958/10/28 専修大学「藤田若雄文庫」蔵。

<sup>47</sup> 『中部日本新聞』1958/10/7付。

<sup>48</sup> 前掲『王子闘争145日の記録 団結がんばろう』168頁。

<sup>49</sup> 鷺谷花「戦後労働運動のメディアとしての幻灯一日鋼室蘭争議における運用を中心に」『演劇研究』第36号早稲田演劇坪内博士記念博物館2013/3。なお、鷺谷氏の協力により王子争議の幻灯『団結がんばろう 協約改悪反対斗争記録』が第8回戦後文化運動合同研究会にて上映された2013/8/30。

れた（下線筆者）。この「組合員の主婦」には管理職の妻との峻別の意識よりも、会社から独立した組合、王子主婦連への意識変革が表れていると考えられる。

### 第3章 王子主婦連

#### 『あゆみ』・『主婦の窓』を発行

##### 1. 王子争議・「地区しんぶん」から

###### 生活記録へのよびかけ

王子主婦連が会誌を発行するまでに至った経過はどのようなものであったろうか。王子主婦連は1957年に発足すると同時に、苫小牧市婦人団体連絡協議会（苫婦連 1952年結成）による初めての『苫小牧婦連協』編集に関わった。苫婦連の会長に就いた王子主婦連会長折笠あやと（43歳）は、1957年8月2日東京開催の第3回日本母親大会に苫婦連を代表して参加し、また同月5日には苫婦連から20名が第8回全道婦人大会に参加していた。参加者による大会の意義や経験を伝える報告会に出席できなかった「婦人達」との「共同学習の場」として考えついたのが『苫小牧婦連協』の発行であった。王子主婦連は編集委員4名のうち2名を送りだし、公民館主事の指導も受けながら、「活字拾い」も手伝い内容豊富な「初心者編集とは思えぬ」第1号づくりにかかわった<sup>50</sup>。そして、その経験は翌1958年のストライキ中に発行された「地区しんぶん」編集に生かされたと思われる。

「地区しんぶん」<sup>51</sup>は社宅と市街地の5地区の闘争委員会が発行し、組合員、主婦、家族に「人気」があった。地域では「支部闘争ニュース」や「壁しんぶん」なども発行されるようになり、争議の激変する11月には、「地区しんぶん」は組合員や主婦との結びつきが深く一番「皆の声がとらえやすい」ものとなっていた<sup>52</sup>。11月19日には「5地区闘新聞」の協議会（王子労組地区闘新聞

協議会）を結成し、それぞれの編集者、通信員31名（内主婦21名）がつどい、運営委員10名を選出した。労組教宣部に所属する協議会は組合員、青年行動隊、主婦で構成されたが、地区新聞は「主婦会の新聞と思われがち」だった。編集、通信とも主婦に「まかせっきり」のところが、「主婦に大変負担」をかけていた。協議会の発足にあたり、主婦通信員の悩みが沢山だされ、全体として解決しなければ、新聞発行の継続がむずかしいと思われた。家庭内では「夫の協力がほしい」という要望のなかには「女のくせにどうせロクなのが出来ないのだからやめろ」という女性蔑視もみられた。しかし、「地区闘新聞」記事からは主婦連編集委員が『さけび』の記事あつめにストライキ中には「ピケ隊の中を駆けまわった」こと、また男性の東部地区闘委員はオルグに提供する「おいしい」みそ汁の具を毎日何にするのかが「一番の悩み」であったことから妻の苦勞が「身を以て知らされた」ことなどマスコミ報道には出てこない社宅地域での争議模様がある。

そして、「地区闘しんぶん」「らくがき運動」を「ますます発展」させる方向性について、地区闘デスク合同会議（11/15）では、「時期がくれば生活記録」へと課題提起している。

さらに散見される「書いて下さい」「生活記録」「生活史」といった労組員や家族への呼びかけを拾ってみると、一筋の働きかけがみえてきた。紙パ本部教宣部は「主婦のみなさまがたへ 闘いの中の生の感じを書いて下さい」と訴えている。王子争議について、主婦連が「なぜこうも頑張るのか？なにが主婦連を支えているのか？」を問いかけた<sup>53</sup>。王子労組苫小牧支部教宣部は『家庭だより』1959年新年元旦号の原稿として「生活綴り方、闘いの日誌、詩、短歌、俳句、コント、創作、小論」「子供たちの目に映った闘いの模様（作文など）」を募集した<sup>54</sup>。

そして、翌年1959年3月の『紙パ労連』誌上にみる「生活史つづり方を書きましょう」に応えたと思われる手記「王子労組一主婦から 激闘から1年たって」がひとりの主婦によって書かれ、全面

<sup>50</sup> 『苫小牧民報』1957/10/11付。

<sup>51</sup> 『とどろき』No2 1959/3付（中部）、『やまて』No34 1958/11/8（山手）、『さけび』No38 1958/12/9付（東部）他。

<sup>52</sup> 「若い主婦の人達熱意がない」「漬け物の時期。猫の目のように変わる情勢では書けない」「本部斗争ニュースになるべく主婦の声を具体的に入れてもらいたい」という指摘もあった。地区（闘）新聞は「地区の人たちの気持を“地区しんぶん”で一本にしぼり、地区の人の団結をますますかためる上で大きな働きをしめています」（「地区しんぶん」のやくわり その1 1959/11/14）。

<sup>53</sup> 「斗争ニュース」No564 1958/11/24。

<sup>54</sup> 「斗争ニュース」No632 1958/12/19。

掲載された<sup>55</sup>。テーマは「“だんけつ”のこと」「“カンパのこと”」「“勝ち負け”のこと」「“おちる”ということ」「“主婦の集り”のこと」「“子供と年寄り”のこと」「“夫と妻”のこと」で、熟考した筆致で書かれている。「思いつくまま」を書き出したのは「紙パの仲間や全国の労働者に」、「主婦はどんなことを考え、悩んでいるのか、という疑問」に少しでも応えたいという思いからであった。

こうした経緯からすれば、「生活綴り方」の系譜のひとつと考えることができる。そこには戦後の文化活動の一般市民、主婦たちへの影響や労働文化の影響がみられる。

紙パ労連書記として苫小牧へ派遣されてきた窪田亨書記は、窓口の担当者としての名前を王子労組苫小牧支部ニュースに記載し、王子の「生活史つづり方」に期待していたと思われる。残念ながら、筆者が聞き取りをした時期には、うたごえや写真に関心をもっていただけから、「生活綴り方」については聞くことができなかつた。聞き手の筆者には主婦連会誌が「生活史つづり方を書きましょう」という流れの中にあつたことに気がついていなかったからである。

## 2. 無期限スト後におしよせた不当解雇のなかで

王子争議は145日間の無期限ストで「中労委幹旋」を労使が受け入れ、12月15日王子労組は一斉就労を果たした。だが、「中労委幹旋」にある争議の收拾を図る「平和回復期間(1958/12/9～1959/3/31)」の終了をみることなく争議は再燃した。つまり「会社による就労後の組織破壊」と「組合幹部に対する攻撃、懲戒処分」となって現れた<sup>56</sup>。就労後の王子労組の職場闘争に対して第1次懲戒処分を1959年3月に強行し、会社の「昭和34年度新規採用」における王子労組の子弟は全員不合格(子弟不採用)であった<sup>57</sup>。こうした時期

に王子主婦連第3回総会(会員1,500名)は開催されたのである。王子労組員への「役付の剥奪、昇給差別等の攻撃が露骨」となるなかでも同年7月には紛争を「年内に解決するよう誠意をもって努力する」という内容も含んだ「平和宣言」を労使連名で「公表」した。同年12月に新労が過半数をこえると、年明け1960年1月会社は「懲戒解雇者の復職拒否」という第2次処分を行った。王子労組は同年2月初めには千人以上の組合員が「脱落」し、王子主婦連もまた300名に激減することとなった【表3】。さらに同年10月、会社は「争議指導責任」を理由に本部3役を解雇した(第3次処分)。この3次にわたる「不当解雇問題」の解決は1978年会社との「和解協定書」をかわすまで20年を要し、ここに1959年からの「不当解雇撤回闘争に終止符」をうった<sup>58</sup>。このような不当解雇撤回闘争に入る時期の1959年1月から王子主婦連は、苫小牧では学習<sup>59</sup>と千歳では会誌の発行にとりかかっていた。

【表3】は、主婦連組織の動向と会誌発行と労組の「不当解雇問題」など(網がけ部分)を書き入れたものである。

## 3. 王子主婦連会誌の発行へ

王子主婦連には発行した会誌に『あゆみ』と『主婦の窓』がある。本稿では、「機関紙」の記載が『あゆみ』10号のみであることから、一定期間に出された「王子主婦連(協)ニュース」などとの違いから、「会誌」と表した。会誌は、主婦連の現勢が激減する困難な時期に発行された。『あゆみ』(王子主婦連千歳分会)4冊と『主婦の窓』(王子主婦連)7冊が現存する<sup>60</sup>。両誌とも3、4割が争議体験の「訴え・想い」を「随想・詩歌」に託している。発行時期の早い『あゆみ』からみていくこととする。

### (1) 『あゆみ』について

<sup>55</sup> 書き手の「ある一主婦」とは加藤真栄子と推測する。51項目の文章を綴った『加藤真栄子ノート』(1953/4～1960頃まで)には同様のテーマと内容、趣旨で書かれている文章が含まれているからである。

<sup>56</sup> 渡辺正雄「総資本との歴史的対決 紙パ労連・王子製紙争議」(総評弁護団編『戦後労働争議と権利闘争 上巻』労働教育センター発行1977)198頁。

<sup>57</sup> 地区闘新聞の風刺「王子勤労課の窓口が2つある事は知らなかった 職業安定所」、つまり就職幹旋をする窓口が第二組合にもあつたという意味。『とどろき』No2 1959/4 王子労組苫小牧支部中部デスク「笑点街」。

<sup>58</sup> 『王子ともしび』解反闘争解決特集号1978/7/25付。和解の背景には「三井三池の大争議で10名の組合役員の不当解雇事件裁判を、三池労組が今春、静かに取り下げ、同じ三井系の王子製紙が『右ならえ』したという全国情勢もあつた」という。

<sup>59</sup> 各社宅地区にて定期的な学習会を開始、間隔を空けながらも1965年迄。鷲山丈司講師(室蘭)は資本主義における女性の地位を考えるため樋口一葉などの文学も取り入れた(参照 太田1976)。「活躍する苫小牧の主婦 涙ぐましい学習風景」『紙パ労連』第356号1959・2.18付。

<sup>60</sup> 『あゆみ』は北海道労働資料センター蔵、『主婦の窓』は加藤真栄子旧蔵資料。

王子主婦連千歳分会は、工場の動力をまかなう支笏湖付近の発電所所在地にあり、1958年11月に結成され、『あゆみ』は翌1959年1月から毎月発行され、王子労組千歳分会が解散した1960年3月までに終刊と思われる。残された『あゆみ』は、10号('59/10)、11号('59/11)、12号('59/12)、13号('60/1)の4冊、各20頁前後で編集され、慣れない鉄筆の文字と絵によって、主婦たちの不安な中にも真摯な気持ちが伝わってくる。

千歳分会からの「脱落」が続出するなかで、役員「改選」挨拶と「にくしみ」を表さずにはいられない日常、家族の結束を家族紹介に込めて工夫した内容となっている。1959年末には主婦連会員35名の千歳分会であったが、同一号にひとりが数編の投稿するような精力的な編集となっている。執筆者（無署名を含む投稿数）は延べ69人。10号には「今日も団結の友は落ちてゆくあの苦しい145日の斗いも同志に裏切られた悲しみもじつところえて今日まで・・・」（静江）、「近頃、我々の組織より切り崩されて落ちて行く人の名前を聞いても前ほど気にならなくなりました」（団子）。11号の「組合が分裂さえしなければ、憎しみも人間への不信もなかったのに」（一主婦）、12号には母親大会の参加報告を「説いて聞かせてくれた」人が「主人が行くものですからと、たった一言いわけをして・・・」（一主婦）と去りゆく仲間との「矛盾」が吐き出されている。また、中川津代は「私の日記」と題して、1年間の自分自身の日記の変化に気づいたと記している。「今迄は家の中の事が主でしたが、だんだん眼が社会の方に向かっての書き方と自分でも感じて」いたという（12号）。

## (2) 『主婦の窓』について

『主婦の窓』は、1959～65年（3年間休刊）の7年間に、創刊号('59/12)、第2号('60/2)、第3号('60/6)、第4号('60/12)、第5号('61/5)、第6号('61/12)、第7号('65/12)が発行された。

1959年6月には『主婦の窓』の名称は決まっていたものの、創刊はその年末となった。会誌は慣れたガリ切りであり、「一日いっぱいガリ切りをしていたよ」と回想する相澤綴子元・主婦連専任書記は、高校のクラス文集づくりの経験を活かして表紙の絵も描いた新卒者であった。また、名称『主婦の窓』は、1958年にテレビ放映開始となった草

笛光子司会による音楽バラエティー「光子の窓」にヒントをえたものであろうか。

『主婦の窓』創刊号の扉は、千歳分会水戸静江の詩に託して「斗争が色々おしえてくれました」、オルグの「仲間のきずな」にも感謝して「大きく育った主婦たち」の声を会誌にこめる喜びを歌い、スタートさせた王子主婦連の意気込みを伝えている。そして各号とも「集会参加記」や「訪問・交流」が自らの気づきを促したことを記している。時々の労働争議支援や団結への取り組みを、「争議」体験に学んだ自らの「連帯」「共闘」への共感とともにを語っている。

「連帯」や「共闘」は会誌の交流にもみられる。王子主婦連『あゆみ』には、名寄市の「ゆかりの会」、「総評主婦会」からの受贈お礼の掲載もある。『主婦の窓』第4号には三井芦別炭鉱主婦会『らくがき帖』第1号からの転載による役員となる人との「労苦」の分かち合いを訴え、日婦協『あゆみ』掲載文章と同一の引用もみられる。関連した道内主婦連等の会誌・文集などの発行は【表4】のような状況であった。炭鉱主婦会の冊子には、ガリ切りや紙面づくりも慣れないものから鉄筆のしっかりしたものまで、挿絵では炭労文化を思わす絵柄もあり、作文指導もみられ多様であった。

王子主婦連の会誌は、王子労組が会社から第一次処分('59)、第二次・第三次処分('60)を受けた時期に発行された。第7号がやっと出来た1965年は、王子主婦連が会員200名を割り、発会時の1割以下、総会・役員会で規約改正等の検討を重ねる運営打開をさぐる次期でもあった【表3】。

『主婦の窓』全体では116稿、延べ96名（無署名含める）の寄稿から編集された。「人にたよらず自分でエンピツを持ってみて下さい。うまい文でなくともよいのです。ありのままの生活を書いてみましょう」（第2号「編集後記」）と呼びかけ、第5号には原稿集めの苦勞ものぞかせながら、「日常生活の中からちょっとしたことをとりあげてエンピツをとってみて下さい」と発行を続けた。

## 『主婦の窓』の寄稿内容

【連帯を求めて】第3号では、詩「みんなで手をつなごう」と、「労働者の妻」も「ホワイトカラー族の奥さんも」と呼びかける。また少数となった主婦連の新会長山本みねは「働く者同志の友愛と

信義に心のスクラム」は結ばれ、「主婦も今までにない心のおちつきを取り戻す」に至った。新副会長新沼愛子は145日の闘いが「三池の闘いと働く者の声が新しい時代をつくる道しるべの様に思えて」ならなかった。合理化と闘う小樽ハイヤー労組主婦会・万字炭鉱支援への共感、戦後「開拓団婦人会」訪問では「一番必要な作業衣」を修理する布がなく、「やぶれて」不要の布でも「廻してほしい」、「新鮮な野菜を安く」出荷したいとの願いにも応えていった。「しあわせの歌」など、「ほとんど歌えなかった」恵庭婦人会の人たちが「本当に良い歌」と、ほめてくれた共感も記している。

〔戦後社会運動との出会い〕「安保改定阻止 日本母親大会アピール」、紙パ討論集会「安保と合理化問題」参加(創刊号)。国際婦人デー50周年よびかけ(第2号)、原水爆禁止運動の平和行進やカンパ活動(第3号)、第4号は「総評主婦の会」結成や道紙パ「主婦会づくり」、新聞値上げ(第2号)・物価値上げ(第5号)への道レベルの学習会。苦・婦連協との協力(第5・6号)、主婦連活動の喜びが「うたごえ」活動の6編、歌詞紹介の3回にあらわれている。第12回北海道平和婦人会総会(第7号)。

日本母親大会参加報告では第6回(1960)と第11回(1965)。第11回大会に初めて参加した土屋静子は「悩みを一生懸命に訴えるお母さんのお話を熱心に聞いてあげるお母さんも大事だということ、私はその聞き役をやってきた」と、共感を分かち合う運動の大切さを伝えている(第7号)。

〔暮らしのヒント〕生活の知恵や工夫、簡単「スピード料理」に「ボルシチ」も加わり和洋今昔メニューを紹介している。主婦連などの社会活動への参加による家事時間の見直しが迫られた結果でもあろう。こうした暮らしの工夫の記事は王子主婦連だけではなく、紙上にも王子争議関連記事が掲載されている『平和ふじん新聞』『民主婦人新聞』の編集にもみられるコーナーであった。戦後の女性たちが求めた生活向上への願いや、生活の改善をはかる手だてやヒントも提供した。

〔夫や家族のなかで〕王子主婦連メンバーは、労働運動・争議体験から「民主化」を夫婦間でも実現することを願った。また、夫の意識改革への期待が「地区しんぶん」づくりにもみられたように、妻の自主性も認めること望んだ。主婦連活動が子

どもの成長期と重なり、「子どもらに負けない」自らの成長をめざした心意気、親子相互ならではのエピソード(おこづかい・誕生日プレゼント、エレキ騒動)もある。さらに子どもの成長にかかわる悩み(性教育、知的障害)も吐露しながら、連帯した人々から学ぶ知恵が支えとなって「待望の特殊学級」を開設させた喜び(第5号)も記している。

また、争議体験は息子に「人間不信」を抱かせていた。「女として、母であり、妻であるが、果たして良き妻、よき母であったかと、そして良き社会人であったかと」問う鈴木ミツ。19歳で「命を絶った息子の分も生きて、社会の変革の為に働かなければ・・・」と綴り(第7号)、94歳の今日も平和運動への志を燃やし続けている。

#### おわりにかえて ―王子主婦連の歩みから―

本稿では、王子主婦連の組織としての推移と関連させながら、主婦連の意識の変革について主婦連メンバーの表現から探ってきた。ここで、そのことを集約する意味で、次に「労働者の妻」、「本当の女らしさ」という表現にふれることとする。

#### 王子製紙に働く

##### ブルーカラーの妻たちの「呼称」変化

王子主婦連の変化を「苦小牧まんがルポ」(画・文佐々木哲)は、「奥様たち」が「闘争」を契機に「労働者の女房」となって駆け出し、そして「日本一の主婦連」をつくりあげたと描いている<sup>61</sup>。戦後、1946年王子労組結成によりブルーカラーの妻たちは差別待遇の改善により、「職員の妻」から「従業員の妻」へ、かつ「組合員の妻」となった。その妻たちは1956年会社と労組による生活改善会に組織されたが、「極めてアイマイ」なことから翌1957年王子主婦連へと移行した。主婦連は1958年無期限ストを闘い、結成後まる2年を経て規約を「組合員の妻」で組織すると改訂し、「労働者の妻」としての自己を認識し、書き表すようになっていた。

主婦連とは「10円を納めるところ」と思ってい

<sup>61</sup> 「静かなる北海ドン」『紙パ労連』第350・351号 1959/1/1・14付。漫画は、鉢巻を手に下駄履きのスカート姿→見ていた主婦が走り出す→真っ黒い顔、運動靴、何処にでも座れるビニール風呂敷→声高らかに「団結がんばろう」。

た「組合員の妻」が「労働者の妻」と書くまでに至ったのは、争議における会社の対応と武装警官隊との対峙、度重なる不当解雇処分の現実を通して「労働者の妻」、ブルーカラーの妻の立場を肌身で知ったことによると思われる。「総労働と総資本」の闘いの現実が「労働者の妻」への認識を自覚させたのである。「労働者の妻」の認識について、道内の「炭鉱主婦会」において「職員夫人との峻別」を強調した「自己規定」であるとする見解もある<sup>62</sup>。「労働者の妻」という自己規定は、単に「職員夫人」との違いを強調するだけではなく、階級的な存在として自覚した表現と思われる。

### 王子争議で語られた「本当の女らしさ」とは

王子争議では、主婦連を「日本一の主婦連」と励ます第一組合と、「醜婦連<sup>しゅうぶれん</sup>」と言い放つ第二組合の主婦の会「あけぼの会」など、争議で飛び交った罵声、憎しみの応酬と主婦連の行動に対する中傷・批判や主婦連から「黙って脱落」していく仲間の行動を通して、「本当の女らしさ」とは何かを考えさせられたのであった。無期限ストを終えて「本当の女らしさというものは、人間性溢れる勇気と正しさがあるかないかで判断するもの」と須藤チヨ（45歳）は記している<sup>63</sup>。

また、「王子闘争支援」の全国集会で道炭婦協会長であった多嶋光子は、「労働組合への弾圧が、次には私達主婦連」へ押し寄せると危機感を持つ中で、楽しみの見方、考え方の転換を次のように助言している。「いけ花にしても主婦のいけ花は私達の社宅にあう、私達の生活にあった花のいけ方がある」そして「私達がレクリエーションで温泉にひたっている時、こういうことのできないでいる人がまだまだあるだろうとかがえてこそレクリエーションの大きな改革ではないだろうか」<sup>64</sup>。後に書道や茶道を独自にたしなむ多嶋光子（1920～2013）の原点をここに見るようである。

さらに、「警官に圧迫」され必死の体験をした加藤真栄子は、翌年の2月の組合結成13周年大会で

「私達の闘い」が「気のつかない所で、大きな大きな力で支えられている」と実感した。それは「60歳過ぎの老婆3人連れ」が満員の会場で「むずかしい」不当解雇の組合報告を「一心に伸び上がって聞き入り」、「長生きしていればいいもんだ。こうしたことに会える」と「もらし」、演壇がみえるように場所を譲ると一人の「老婆」がゆで卵をそっと渡してくれた体験によるものだった<sup>65</sup>。

1950年代ブルーカラーの女性たちの意識には、「組合員の妻」から「労働者の妻」への階級意識を踏まえたうえでのヒューマニズム、女性像へと昇華させた意識の世界を見出すことが出来る。須藤チヨ、多嶋光子、加藤真栄子の言葉は、それらを物語っているのではなかろうか。

### 今後の研究課題

本稿の検討から得たことを今後の研究課題を含めて確認しておきたい。戦前の官制女性運動の「行動力」が戦後婦人会活動や主婦会活動へ繋がったといわれることがある。しかし、戦後地域女性史のあゆみは漠然とした部分も多いのではなかろうか。主婦会づくりを進めてきた全道労協は会社側による「新生活運動を持ち込み」にたいして警戒している（『第8回定期大会議案書』1957/8）。しかし、全道労協傘下に結成された北海道主婦会連絡協議会の加盟団体（炭婦協・日婦協・王子主婦連など20単産10万人）の活動目標に「生活改善、生活向上」が掲げられている。その「生活改善、生活向上」を労使関係からも読み解き、個々の家族会・主婦会の独自性と相互の関連性、その後の発展などを明らかにすることは、道内各地の地域女性史に厚みを増すことになるだろう。王子の生活改善会の展開は大企業の生活改善研究のみならず、地域女性史の可能性を示すことになるのではなかろうか。なお、以上とも関連する日鋼室蘭の第二組合による新生活運動、「既婚婦人」の主体性などに関する中村広伸の研究がある<sup>66</sup>。

<sup>62</sup> 古村えり子「北海道炭鉱主婦協議会が生活福祉に果たした役割—ある産炭地の事例から」札幌女性問題研究会編『北海道社会とジェンダー』明石書店2013、104頁。

<sup>63</sup> 「えんぴつ」主婦の声『家庭だより』第22号、1959/1/1付。

<sup>64</sup> 第3分科会「主婦連組織と家族組合について」『王子闘争支援 全国職場闘争討論集会議事録』1959/3/28～31 苫小牧市公民館ほかにて開催。

<sup>65</sup> 「ゆで玉子と老婆そしてその言葉」『加藤真栄子ノート』。「激闘から一年たって」『紙バ労連』第385号、1959/9/23付。

<sup>66</sup> 「高度成長期前夜における労働者家族のジェンダー関係の構築—日鋼室蘭争議を事例として」（前掲『高度成長の時代3成長と冷戦への問い』）。『家族ぐるみ』闘争における主婦像の形成過程 日鋼室蘭争議を事例として『同時代史学会 News Letter』第6号、2005/4。「『家族ぐるみ』闘争における消費活動をめぐる攻防—日鋼室蘭争

王子主婦連とその会誌は高度成長期のブルーカラーの妻たちの意識のあり様を刻印している。荒川章二によると「妻たちの組織化は労使の力関係を左右する要素」<sup>67</sup>であったという。それゆえに王子の組合分裂後の主婦連への中傷・批判は会社、第二組合など一部世論も含めて激化せざるを得なかった。その意味で、王子主婦連会誌は中傷・批判されたブルーカラーの妻たちの記録である。他方、道内では1955年頃から総評傘下の炭労において生活綴り方運動に「力をいれていく」申し合わせをしている<sup>68</sup>。こうした背景から主婦連会誌は生活記録運動の系譜につらなり、ひいては、西川祐子が指摘するように、高度成長の「破綻」も含めた「社会変動」を捉える「各地における持続的観測と記録」<sup>69</sup>となりうるように思われる。

#### 最近の戦後労働文化研究に関わるなかで

筆者は、戦後労働運動を北海道において学ぶ機会を2014年8月にもった。「いま日鋼（室蘭）争議60年を語りつぐ集い」<sup>70</sup>と「第8回戦後文化運動合同研究会」<sup>71</sup>である。筆者は合同研究会において「王子製紙争議記録《幻灯》にみる王子主婦連～会誌『あゆみ』『主婦の窓』へ込めたもの」を報告し、王子主婦連の前史としての生活改善会を加えて本稿とした。

合同研究会では、50年代の労働運動の特徴である「家族ぐるみ闘争」における「主婦の存在」の研究が「手薄である」（水溜真由美）ことが指摘され、コメントでは、王子の生活改善は人口問題研究会の「例外的な生活改善会」（和田直樹）と位置づけられ、王子の会誌は生活記録として「何が記録されたのか」（富永昌公）という問いが出された。

このような意見に応えることを意識して本稿に取り組んだ。

本稿で資料とした王子労組『家庭だより』、第1回王子主婦連「総会議案」、幻灯フィルムなど近年になって「王子製紙争議を語りつぐ会」などを通して交流してきた方々から受贈・閲覧することが出来ました。また、これまでいただいた多くの資料・証言なども永年にわたる皆さまの思いを託して保存され、提供されたものです。これらに対して感謝申し上げます。

そして関係機関のご協力によって資料を閲覧させていただいたことに、御礼申し上げます。

本稿作成にあたり、これまで多くの方々のお励ましをいただいていたことに感謝申し上げます。とりわけ、大門正克氏、早川紀代氏をはじめとする「総合女性史学会」諸姉によるご教示と励ましをいただき、水溜真由美氏には「戦後文化運動合同研究会」などでお世話になり、また永年にわたり「札幌女性史研究会」の皆さまには研究交流と励ましをいただいたことに感謝申し上げます。

本稿は、独立法人日本学術振興会 平成23年度科学研究費補助金（奨励研究）の助成を受けた成果の一部である。

議を事例として」『大原社会問題研究所雑誌』No523、2002/6。

<sup>67</sup> 荒川章二『日本の歴史16「豊かさへの渴望」』小学館2009、40・41頁。

<sup>68</sup> 辻智子作成資料「生活記録運動およびそれに関連する実践の主な動向（1950年代）」：報告「紡績女子労働者の生活記録運動」2014/8/30。

<sup>69</sup> 西川祐子「[生活綴り方]と[生活記録]の出会い」（西川祐子・杉本星子編『共同研究 戦後の生活記録にまなぶ 鶴見和子文庫との対話・未来への通信』）日本図書センター2009、142頁。

<sup>70</sup> 2014/8/10 室蘭開催 幻灯「日鋼室蘭首切反対斗争記録 嵐ふきすさぶとも」（1955年製作）第2巻の映写と講演（鷺谷花）。道内外から170名参加。

<sup>71</sup> 2014/8/30・31 札幌開催、「生活記録をめぐるセッション」にて筆者報告。

【表1】 王子労組苦小牧支部機関紙『家庭だより』と回覧板生活改善会『文書』

\*『家庭だより』は家と記す。

( 要求の推移 1955/11～1957/12 )

号数 文書	発刊日	生活改善会・生活要求	組合主張・見解・要求	王子主婦連	会社の「近代化」
回覧板	1955 11・7	生活改善の実践要目案。			
家・第15号	1956 11・10	火災防止。	一時金要求。復職要求闘いの進め方。		機械導入・人員削減。会社合理化攻勢。
		A型アパート(キッチン・サンルーム付写真)を会社約束。	要求試案(正規・備員)。		
		厚生だより(居住地域総点検運動、壁塗り替え解決)。	レッド・パージ(レ・パ)はなぜ行われたか。 レ・パ該当者の生活実態。		テックス係特定員・60歳の停年退職制砕木係・工作課人員削減問題、山林土場人員不足。
家・号外	1956 11・23	西部生活改善会、料理講習会。	決起大会開催、娯楽場。		
		冷害農家を救済。 災害地の子供の作文。	一時金と復職の闘争経過。 レ・パ該当者の解雇当時の様子。		
			王子「床屋さん」待遇改善で労働組合結成。		
回覧板	1956 12・11	冷害農民救援 歳末たすけあい運動実施			
家・第16号	1957 1・15	生活改善会の発展のために。料理講習会を開く迄。座談会(一時金の使い方)。	「主婦と生活改善運動」。 レ・パ該当者の声。		オートメーションと私たち働く者の立場。
		助け合い運動集計結果。	年頭挨拶(組合役員)。		
案内	無記載	生活改善会、今後の運営 1/24開催(労組支部長)。			
家・第18号	1957 10・2	子供のしつけ。入浴時間。 カゼ予防。貧困児童へ衣類を、西部地区主婦連	労働者の声・「生活完成」も。 年末一時金要求本部案。 完成の陰に主婦の協力。	主婦の声「主人が倒れても会社は動く、一家はそれこそ大変」。	我々の汗と油の結晶。 日本最大の208吋マシン完成。
家・号外 No1	1957 11・6		本闘委令スト権確立。 11/3 5人目の犠牲者	犠牲者の遺児3人	一時金、安全衛生問題に期限付き回答拒否。
家・号外 No2	1957 11・13		一般投票。 11/14 3時間時限スト		「紙パ全経営者の引延ばし戦術を実力」打破。
家・第19号	1957 11・20	敬老会・病院だより・火災注意。	弔辞。家族ぐるみの闘いに年末一時金要求。	全道労協主婦交流会	「会社の不誠意に断固鉄槌を」。
家・号外 No12	1957 12・15	年末助け合い運動に協力。		主婦の声(18号)再掲載。	「安全衛生問題を一時金との同時回答」果たさず。
家・号外 No15	1957 12・19		紙パ労連「同情スト」決定。	炭鉱主婦代表の支援。	
家・号外 No17	1957 12・26		「闘争態勢を解く」。	組合員家族報告会。	

【表2】 王子労組“幻灯”スライドにみる王子主婦連の活動

(数字はスライドのコマ番号、説明は『説明台本』より略記)

## 1、『紙都の嵐』

解説の基本は、「見よ 我々の激しい斗いを」。

→4 無期限スト後突入、初総決起大会、組合・主婦の団結は「未だしの感」→6 分裂者への怒り爆発 隊伍堂々デモ  
 主婦の団結もりあがる→8 主婦連堂々デモ行進→9「切り崩しお断り」貼り紙 社宅・居住地への教宣（ビラ・ニュー  
 ス・写真・壁新聞・青行隊の紙芝居）→12 スクラムと労働歌→14「斗争ニュース」家庭に配布 主婦の意識高まる→  
 15 地区共闘本部設置→16 共闘オルグ団続々→23、24 主婦連のピケ隊激励→30 青行隊のビラ貼り→33「お父さん頑張  
 れ、お母さんしっかり僕がみている！」→40 職制裏切りの主謀者への「葬式デモ」→青帽脱落組、警官との激突→58  
 東洋高圧の主婦砂川より→59 わらび座慰問→62 検束者帰る 主婦の笑顔・子どもら→72 団結袋→74 主婦連7割生活  
 →78 妨害排除の仮処分9/6～ピケ隊と警官「構内警備」～81 主婦連ピケ隊の背後からも→91 マンガ脱落組の作業ぶり  
 →92「敵よりも1日長く」→93「紙パ、いや全国労働者諸兄よ、…全国労働者頑張ろう！！（完）。

## 2、『団結がんばろう！ 協約改悪反対斗争記録』 解説の基本は、「主婦を含めた強力な共闘体制」。

**1958年以前** →会社の労務対策（6 巧みな家族主義）→8（苫小牧市）人口の1/4 王子労働者と家族→14「お父ちゃん  
 たちの身体を守れ」主婦連結束。

**1958年** →23 厚生施設使用中止（児童溺死 7/23）→24 協約改悪は台所に結びつく。「私たちもだまっていられません。  
 今日から」→26/18 無期限スト共闘体制 地域・家族ぐるみ→33 オルグ「主婦連にたくましい（オルグの）斗いの経  
 験語る」→34 敵よりも1日長く・・・主婦らの合言葉→35 団結袋「労働者の妻」を誇り→36 真白いエプロン、夜でも  
 数分で集合千名→37 婦人組合員説得「隊列へ帰ってきて」→44「警官は王子争議から手をひけ」主婦も→46 無関係  
 な争議資料押収、組合員と主婦団結→49 苫・主婦の野球大会→53 民主警察の姿であろうか、組合員主婦憤り→55 入  
 構を許す→56 脱落者の「合同慰霊祭」→61 入出荷阻止/暴力団→62 学習活動→63 主婦を含めたデモ→64 おわり。

\* 紙パ労連王子労組教宣部 1958年製作による幻灯(斗争記録スライド/日本幻灯文化社製)と『説明台本』。

『紙都の嵐』第一部（苫小牧支部教宣部）全93コマ、『団結がんばろう 協約改悪反対斗争記録』全64コマ。

王子製紙争議を語りつくす会 所蔵。

【表3】王子主婦連（苫小牧）の役員・会誌（1957～1995）

\*会誌『あゆみ』は「あ」、『主婦の窓』は「窓」と記載。網掛け部分は「不当解雇問題」など。 (名)

会誌	年	総会・行事	会長	副会長	事務局・書記・会計	会員	労組員
	1957	3/20 主婦連創立	折笠あやと			2,100	3,143
	1958	4/ 第2回総会				2,039	
		1958/7/18～12/9 無期限スト					
		8月2日	折笠あやと	梅木・中田・平田			
		1958/12/15 一斉就労					
	1959	1959/1/31 第一次処分通告（職場闘争に対して解雇4名を含む35名懲戒処分）					
				中田すみ子		2月1,800	2,144
		1959/3/31 まで中山伊知郎中労委会長斡旋による平和回復期間					
(あ・10号) 10/10		4/19 第3回総会	折笠あやと		書記 中島綴子	1,500	
(あ・11号) 11/		1959/7/21 「平和宣言」会社と王子労組で調印					
(あ・12号) 12/10 (窓・創刊) 12		10/20 臨時総会	児玉リヨ	鈴木美津	和田スエ		
(あ・13号) 1/10 (窓・第2号) 2/9	1960		児玉りよ子		中島綴子	335	
		1960/1/15 第2次処分（3/4解雇1名）					
(窓・第3号) 6/		6/ 第6回総会	山本みね	新沼愛子	北島栄子・中島綴子	300	500
(窓・第4号) 12/		1960/10/25 第3次処分（本部3役解雇「争議指導責任」）					
(窓・第5号) 5/	1961	4/ 第7回総会	加納千鶴子		鈴木ミツ、中島綴子	300	
(窓・第6号) 12/		4/29 第6回総会					
	1962	5/24 第7回総会			相澤綴子		
	1963	5/31 第8回総会	加納千鶴子		薄井信子	210	
	1964	5/15 第9回総会 規約改正	下総房子	片岡トキ	薄井信子	198	
	1965	1/22 第8回部長会議：規約改正。 1/31 規約改正委員会 2/23 規約改正案。 4/12 新旧三役打ち合わせ					
		4/24 第10回総会	鈴木美津	佐々木	薄井信子		
		9/21 第3回幹事会					
(窓・第7号) 12/25	1965		加納千鶴子		薄井信子		
	1966	1/25 新年宴会					
		3/9 第2回選考委員会					
		5/ 第12回総会	加納千鶴子	佐々木	薄井信子		
		以後毎年総会開催					
	1970	第16回総会	加納千鶴子		薄井信子	76	
	1972	7/ 第18回総会	加納千鶴子		薄井信子	70	
	1977		加納千鶴子		薄井信子		
	1978	1978/7/10 王子労組「不当解雇問題を和解」会社と「和解協定書」					
	1995		加納千鶴子		薄井信子		

\* 参照資料『あゆみ』北海道労働資料センター所蔵。王子主婦連旧蔵資料『王子主婦連』（1959第3回総会議案）、「王子主婦連議案書」1959～71年。加藤真栄子旧蔵資料『主婦の窓』、『主婦連幹事会記録』（1963～1968年）。『ノート活動日誌』（1961～66年）。山本みね旧蔵資料『ノート』。氏名（聞き取り、関連ニュースなど）。開催日、氏名など判明分のみ記載。

【表4】 北海道内の主婦連(家族会等)発行の会誌・文集など所蔵状況

(2013年調べ)

所蔵先		
会誌・文集名	発行した主婦連(家族会)など	発行年、冊数
<b>法政大学大原社会問題研究所</b>		
『こかげ』	住友赤平砒業所鉱主婦の生活綴方	1960、3冊
『赤平 主婦新聞』	赤平炭鉱主婦会	1960/7/25付、第75号 1部
『母のうぶごえ』	太平洋炭砒主婦会文化部 生活綴方	1956～1957、3冊
『あゆみ』	夕張砒主婦会生活綴方グループ(あゆみ會)	1956～1960、1963、9冊
<b>北海道労働資料センター</b>		
『あゆみ』	日鋼主婦協議会機関紙	1958/7、No19 1冊
『あゆみ』	王子製紙主婦連絡協議会千歳分会	1959/10～1960/1、(10～13号) 4冊
『まるい窓』	東(洋高)圧家族組合	1966/5/10付、4号 1冊
<b>北海道立図書館</b>		
『茂尻主婦新聞』	茂尻炭礦主婦会	1956/10/25付、No15 1部
<b>佐藤邦子元・太平洋炭砒主婦会会長・炭婦協会長</b>		
『母のうぶごえ』	太平洋炭砒主婦会文化部	1955～1994、全39巻
<b>王子製紙争議を語りつぐ会</b>		
『主婦の窓』	王子製紙主婦連絡協議会	1959/12～1965/12、第1～7号 7冊
『あゆみ』	日鋼主婦協議会機関紙	1957/6/25付、No14 1冊

\*なお、2013年11月30日シンポジウム「空知の炭砒の女性たちが語る集い—炭砒主婦会・炭婦協の歴史に学ぶ」

では太平洋炭砒主婦会『母のうぶごえ』が紹介され、シンポジウムは炭砒の記憶ブックレット3『そらち炭砒の女性たちが語る集い—炭砒主婦会・炭婦協の歴史に学ぶ—』2014/5/30産炭地研究会編にまとめられた。

(きし のぶこ・王子製紙争議を語りつぐ会)